連体修飾構造の習得過程に関する研究概観
ー「の」の過剰使用と脱落を中心にー

高橋　織恵

詳細目次

1. はじめに
2. 連体修飾構造の特徴
2.1. 日本語の特徴
2.1.1. 修飾部の品詞
2.1.2. 語順
2.1.3. 「N1＋のN2」
2.2. 諸言語の特徴及び日本語との対照
2.3. 対照言語分析の限界
3. L1習得における研究
3.1. L1幼児の発達プロセス
3.2. 「の」の過剰使用の要因の仮説
3.3. 本章のまとめ
4. L2習得における研究
4.1. L2幼児・児童
4.1.1. L2幼児・児童の発達プロセス
4.1.2. 「の」の過剰使用と脱落の要因
4.2. L2成人
4.2.1. L2成人の発達プロセス
4.2.2. 習得に影響を与える様々な要因
4.2.2.1. 日本語のレベルと「の」の過剰使用
4.2.2.2. 言語転移
4.2.2.3. 特定語彙と「の」の結びつき
4.2.2.4. 知識と運用
4.2.2.5. 学習環境
4.3. 本章のまとめ
5. おわりに
稿末注
参照文献

連体修飾構造の習得過程に関する研究概観
ー「の」の過剰使用と脱落を中心にー

高橋 織恵

要 旨

第2言語(L2)としての日本語を学ぶ学習者の発話に見られる「面白いの先生」のような、形容詞や動詞が名詞を修飾する際に不要な「の」が挿入される現象は、従来学習者、特に中国語話者の母語の干渉だと見なされることが多かった。しかし、このような現象は日本語を母語(L1)とする幼児の習得過程にも観察されるものである。本稿では、L1幼児及び多様な属性を持つL2学習者に対して行った連体修飾構造の習得過程の研究を概観し、その研究結果から、「の」の過剰使用はL1及びL2の連体修飾構造の習得において共通に見られる現象であることを示唆する。一方、連体修飾構造のL2習得は、学習者のL1からの言語転移も観察されており、L1だけでなく、年齢、学習環境などが相互に関連する様々な要因が絡みあう複雑な発達プロセスであることを示唆する。その上で、今後の連体修飾構造の習得過程の把握に向けて提言を試みる。

【キーワード】連体修飾構造、 「の」の過剰使用、 「の」の脱落、 言語転移、 発達のプロセス

1. はじめに

日本語を第2言語(L2)として教えている者にとって、学習者の「あの面白いの先生は、国語先生です。」のような言い方はなじみのあるものであろう。これは、「名詞」や「形容詞」が「名詞」を修飾する際に「の」が過剰に挿入されていたり(以下「の」の過剰使用[1])、必要な「の」が脱落したり(以下「の」の脱落)している誤用である。このような誤用がL2学習者の言語に見られることは従来から多く指摘されているが、その多くは中国語母語話者の典型的な誤用であり、母語の干渉であると説明されることが多かった(奥野 2003b; 小山 2003)。例えば、張(2003)は、学習者の誤用は体系をなしており、その体系を支える要素には類推といった「一般的認知能力」と「母語の知識」があると述べた上で、前述のような連体修飾構造における「の」の誤用を中国語の「的」の悪影響だとしている。しかし、連体修飾構造における「の」の過剰使用や脱落は、中国語以外の言語を母語に持つL2学習者にも観察され、中国語からの影響だけではこの現象を説明できない。また、このような「の」の過剰使用の現象は、第1言語(L1)の幼児の言語発達にも見られ、連体修飾構造の習得[2]過程において「*赤いのブーブー(*は非文法的)」のように、「形容詞」と「名詞」との間に「の」が出現する時期があることが明らかになっている(永野 1960; 大久保 1967; Clancy 1985; 横山 1990 等)。このことから、連体修飾構造における「の」の過剰使用の現象は、L1、L2に関らず日本語習得において共通に見られる普遍的な現象だと予想されるが、その一方、L2習得においては学習者のL1からL2への言語転移[3]の側面も指摘されている(迫田 1999; 奥野 2000, 2001, 2002, 2003a, 2003b; 李 2004 等)。

このように、連体修飾構造の習得過程に関し、L1及びL2の習得過程の類似性、L2習得独自に見られる言語転移などの個別性といった多様な面が明らかになりつつあるが、まだ研究が少なく不明な点も多い。「の」の過剰使用が言語習得の普遍的なメカニズムの働きによるものだとしたら、連体修飾構造の習得過程は、言語習得プロセスの解明という点で今後の研究が期待される興味深い対象である。また、連体修飾構造は、L2学習者が正しい形を作るには修飾部・被修飾部の語順や意味関係などクリアしなければならないポイントがいくつかあり、習得が容易ではない項目の一つである(市川 2000)。よって、研究の成果を教育現場に還元するという点でも、連体修飾構造の習得研究は意義あるものだと言えるだろう。

長友(1998)は、第2言語習得研究において「発達のプロセス」、「母語転移」、「普遍性」の3つの視点

を踏まえる必要があると主張している。これは、学習者言語が可変的な言語体系であること、そして、そこには学習者の母語の転移や母語の違いに関らず共通した言語習得過程があるという事実からである。そこで、本稿では、これまでの「の」の過剰使用を中心に連体修飾構造の習得に関する研究を概観し、長友が述べた3つの視点と絡め、研究から得られた示唆を紹介する。そして、この現象の実態を更に明らかにするために、今後の研究への提言を試みたい。

まず第2章で、日本語の連体修飾構造の特徴について紹介し、L2研究における被調査者の母語の転移を探るために、調査対象となった学習者の母語の言語特徴を簡単にまとめて紹介する。第3章では、L1研究の成果からL2研究に示唆されることを探るために、L1の習得研究から明らかになった連体修飾構造の発達のプロセス及び「の」の過剰使用の要因について紹介する。第4章では、L2幼児・児童及び、L2成人を対象にした研究を概観して明らかになった類似点と相違点を指摘し、L1習得からの示唆を基にL2の習得過程に関して論じる。最後に第5章では、現在までに明らかになった研究成果をまとめ、今後の研究に向けて提言を試みる。

2. 連体修飾構造の特徴

本章では、日本語及びL2学習者の母語となる諸言語の連体修飾構造の特徴について簡単に紹介したい。また、本稿における連体修飾構造の指すものと、焦点を当てる範囲もここで述べる。

2.1 日本語の連体修飾構造の特徴

ここでは、日本語の連体修飾構造の特徴を修飾部の品詞、語順及び「名詞＋の＋名詞」における「の」に絞って簡単に説明する。

2.1.1 修飾部の品詞

連体修飾構造とは、修飾語が体言すなわち名詞を修飾する「修飾部＋被修飾部」の構造である。日本語の連体修飾語には、表中の例文(1)-(8)で示されるように、名詞(N)、形容詞(A)、動詞(V)など様々な品詞がある。本稿では、日本語の形容詞(A)をその活用の相違から、「い形容詞[4](IA)」「な形容詞[5](NA)」と区別する。連体修飾構造において、IA、NA、V及び連体詞が名詞を修飾する際には「の」を必要としない(例文2-5)。通常N1がN2を修飾する際には「の」を必要とする(例文1)が、「日本語教師」における「日本語」と「教師」のようなN1とN2の結合に「の」を必要としない複合名詞もあり、それについては2.1.3で後述する。

次の(1)-(8)で示された品詞はみな名詞を修飾して名詞句を作るが、本稿では特に修飾部のN, IA, NA, Vが名詞を修飾する場合の連体修飾構造(例文1-4、表1の網掛け箇所)の習得に関する研究をとりあげる。連体詞、数詞、副詞、助詞による連体修飾構造(例文5－8)に関する研究や、「特別」「同じ」のような複数の品詞として活用をもつ語彙の連体修飾構造の習得に言及している研究はほとんど見られないため、本稿ではとりあげない。

表1 「の」の必要性

連体修飾構造 ＼ 「の」の有無		の ＋	の φ
(1)N1+N2	ローマの休日	○	
(2)IA+N	おいしい水		○
(3)NA+N	静かな湖畔		○
(4)V+N	国へ帰る人		○
(5)連体詞＋N	そんな約束		○
(6)数詞+N	一杯のかけそば	○	
(7)副詞+N	たくさんのお土産	○	
(8)X+助詞＋N	父からの手紙	○	

(○：正用　＋：「の」必要　φ：「の」不要)

なお、述語を伴って名詞を修飾する節である連体修飾節や関係節の定義は国語学において様々であり(齋藤 2002b)、また、修飾部と被修飾部の名詞との関係性も多様である(奥津 2004; 西山 2004)。しかし、本稿ではその差異は取り扱わず、全て修飾部の品詞によってのみ分類する。また、被修飾部のテンス・アスペクトなども問題としない。つまり、本稿は「連体修飾構造の研究」に焦点をあてており、その内容は「連体修飾節の研究」が指す内容とは異なっている。

2.1.2 語順

日本語では修飾する語句と修飾される語句の語順が常に同じで、修飾部が被修飾部の直前に来る。これは修飾部がどんな品詞であっても同様である(下線：修飾部、□：被修飾部)。

(9)私(N)の　本

(10)高い(IA)本

(11)有名な(NA)本

(12)私が買った(V)本

ただし、会話においては倒置が起こり、(13)のように修飾部と被修飾部の間の順序が逆になることがある。

(13)「本、先週買った(V)。」

2.1.3 「N1＋の＋N2」

例文(1)－(4)からわかるように、連体修飾構造において修飾部と被修飾部の間に「の」が必要なのは、N1 が N2 を修飾する場合(「N1＋の＋N2」)のみである。この「N1＋の＋N2」の「の」は、日本語文法では一般に格助詞とされており(井口・井口 1994)、その意味は N1 と N2 の関係によって様々な意味を持つ。

(14)これは先生のかばんです。(所有)

(15)歴史の本を買いました。(内容説明)

(16)銀行の隣に花屋があります。(位置基準)

(17)先日の展覧会で、ゴッホの絵を見ました。(作成者)

(18)私が局長の上岡です。(同格)

(庵功・高梨・中西・山田 2002: 30)

また、「女スパイ」、「日本語教師」のように、日本語には N1 と N2 の間の「の」を介さずに複合名詞をつくる場合がある。その語が漢字熟語として確立しているか否かで 1 語として捉えられるかどうか異なる(市川 2000)。例えば、「テキーラ瓶」はまだ一語としては確立されておらず、「テキーラ」と「瓶」の間に「の」を入れて「テキーラの瓶」としないと落ち着かないが、「ビール瓶」は確立しているため「の」はなくても不自然ではない。

2.2 諸言語の特徴及び日本語との比較

では、2.1 のような特徴を持つ日本語の連体修飾構造を L2 として習得する場合、どのようなことが予測されうるだろうか。対照分析の観点からみると、修飾部と被修飾部の語順が日本語と異なる言語、日本語の「の」に相当する要素を持たない言語、「の」に相当する要素はあるがその用いられ方が日本語と異なる言語などを L1 に持つ学習者が、L2 として日本語の連体修飾構造を習得する際に、母語の転移が起こる可能性が考えられる。4 章で L2 の習得研究を概観するが、言語転移について論じていく上で学習者の母語の言語的特徴にも言及するため、以下諸言語の連体修飾構造に関する特徴を簡単にまとめ、日本語との対照を試みる。なお、本研究で取り上げた研究の被調査者の母語は 15 言語以上であるが、ここでは、言語転移について言及のあった L2 研究の被調査者の母語 5 つをとりあげ表 2(p9)にまとめる。この表は、先行研究(白畑 1994; 奥野 2003a, 2003b; 李 2004)を参考に筆者が作成した。白畑(1994)、奥野(2003a, 2003b)では、日本語の「の」に相当する独立した要素の有無が N、IA/NA、V で必要かどうかという観点からのみで述べられているが、例えば「N1+の＋N2」構造の意味によってその要素の必要性は異なっており、また李(2004)が指摘するように、「の」に相当する独立した要素は必要としないが修飾部の語幹の変化を必要とするものがあるなどもっと複雑なものであると考えられるため、それを表に加えた。

韓国語

基本的な語順も連体修飾構造における語順も日本語と同様で、「の」に相当する独立した要素「의」がある。日本語の A のように IA と NA の区別がなく、A 及び V が名詞を修飾する場合には「의」は不要であるが、連体修飾用の語尾が修飾部の語幹につく。李(2004)によると、A の修飾部の場合、テンスによって語尾「ㄴ(n)」・「은(eun)」か「(었)던((eot)teon)」が義務的に付く(例：예쁜 얼굴／かわいい顔)。V が修飾部の場合、テンスによって語尾「ㄴ (n)」・「는(neun)」・「ㄹ(l)」が義務的に付く(例：내가 기다린 사람／私が待っていた人)。また、N1 が N2 を修飾する場合には、日本語は N1 と N2 の関係が異なっていても全て「の」を必要とする(例文 14-18)が、韓国語では統語的･意味的な規則によって「의」が必要かどうか異なる(李 2003)。

中国語

基本的な語順は SVO で日本語と異なる(例：我会喝酒／私は酒が飲める)が、N1＋N2 及び A(IA/NA の区別無)＋N の語順は日本語と同様である(例：新的工作／新しい仕事)。また、V＋N の語順も日本語と同様である(例：刚来的人／今来た人)。水野(1993)によると、中国語には「の」に相当する独立した要素「的」があり、原則として A や V が名詞を修飾する際にも必要であるという点で日本語と異

表2　諸言語の連体修飾構造の比較(白畑 1993a; 奥野 2003a, 2003b; 李 2004 を参考に筆者作成)

項目／言語	基本的語順	「の」に相当する要素	修飾部と被修飾部の日本語との語順比較	N と被修飾 N の「の」に相当する要素の必要性と例	IA/NA と被修飾 N 間の「の」に相当する要素の必要性と例	V と被修飾 N 間の「の」に相当する要素の必要性と例
日本語	SOV	の	修飾部＋被修飾部	○ ・父の眼鏡<所有> ・日本語の勉強<内容>	× ・新しい仕事 ・有名な大学	× ・今来た人
韓国語	SOV	의	同	△ ・아버지의 안경 (父)(の)(眼鏡) ・일본어 공부 (日本語)(勉強)	＊(語幹) ・새 일 (新しい)(仕事) ・IA と NA の区別無	＊(語幹) ・지금 온 사람 (今)(来た)(人)
中国語	SVO	的	同	△ ・日語(的)学習 ・父親的眼鏡	○ ・新的工作 ・IA と NA の区別無	○ 剛来的人
英語	SVO	of/'s /with/ to/ 他前置詞	異・一部同	○ / 's (語順同) ○(語順異) ・farther's glasses (父)(の)　(眼鏡) ・study of Japanese (勉強)(の)(日本語)	×(語順同) ・a new job (新しい)(仕事) ・IA と NA の区別無	×(語順異) the man (who) just came (人)(関係詞)(今)(来た)
タイ語	SVO	kong	異	△ ・wanta kong po (眼鏡)(の)(父) ・kaan rian Phaasaa yiipun (勉強)(日本語)	× ・gaan mai (仕事)(新しい) ・IA と NA の区別無	× ・khon thii maatoon nii (人)(関係代名詞)(来た)(今)
マレー語	SVO	なし	異	△ ・cermin mata kepunyaan (眼鏡)(父) ・pelajaran bahasa jepun (勉強)(日本語)	× ・kerja baru (仕事)(新しい) ・IA と NA の区別無	× ・orang yang datang itu (人)(関係詞)(来た)(今)

(○：必要、×：不必要、△：意味によって必要な場合とそうでない場合有、＊：「の」に相当する独立した要素は必要がないが、修飾語の語幹の変化などが生じる)

なる(例：新的工作／新しい仕事)。また、「N1＋N2」構造において、N1 と N2 との意味関係によっては「的」が省略されやすいという点も日本語と異なっている。

英語

基本的には SVO で語順は日本語と異なる。英語では、“of”、“with”、“to” 等の前置詞が日本語の「の」に相当する独立した要素と考えられる。「N1＋N2」構造において用いられ、A(IA/NA の区別無)及び V が名詞を修飾する際には必要としない。V が N を修飾する際には、“who” や “where” などの修飾部を導く関係詞を用いる。修飾部と被修飾部の語順に関しては、修飾部が所有／属格の場合(例：farther's glasses／父のメガネ)や IA/NA(区別無)の場合(例：a new job／新しい仕事)は日本語と語順が同じであるが、N が名詞を修飾する際に、「の」に相当する前置詞(“of” 等)を用いた場合(例：study of Japanese／日本語の勉強)は語順が日本語と逆になる。V が N を修飾する際にも日本語と語順が逆になる(the man who just came／今来た人)。

タイ語

基本的な語順も、N や A(IA/NA の区別無)、V による連体修飾構造における語順も日本語と異なる(例：gaan mai／新しい仕事)。タイ語には、「の」に

相当する要素“kong”があり、白畑(1994)では N1 が N2 を修飾する場合に“kong”が必要だと述べられている(例：wanta kong po／父の眼鏡)。しかし、その必要性は N1 と N2 が示す意味関係によって異なっており、全ての「N1+N2」構造に“kong”を必要とするわけでなく統語的･意味的な規則による。A や V が名詞を修飾する際には、日本語同様に“kong”を必要としない。V が N を修飾する際には、修飾部を導く関係詞“thii”を用いる。

マレー語

基本的な語順も連体修飾構造における語順も日本語と異なっている(例：kerja baru／新しい仕事)。小野沢(1998)は、マレー語には「の」に相当する独立した要素はなく、通常、N や A(IA／NA の区別無)、V が名詞を修飾する際に何も必要としないとしている。修飾関係や意味関係を際立たせるために、A、特に V が名詞を修飾する際には、関係詞に相当する“yang”を用いることが多い(例：kerja yang baru／新しい仕事)。

2.3 対照分析の限界

ここでは、L2 として日本語を学ぶ学習者の連体修飾構造の習得に関して予測されうることについて考えてみたい。張(2003)は、1 章で紹介したように、自身の日本語学習及び教育活動と対照分析から、中国語を母語とする学習者の連体修飾構造における「の」の過剰使用は中国語からの負の転移だとしている。また、「の」の過剰使用と同様に、日本語の「N1＋N2」構造における「の」の脱落も母語の影響だと述べている。例えば、中国語では「N1+N2」構造において、N1 と N2 が全体と部分の関係にある場合(例：「コートの袖」)や N1 が N2 の素材を表す場合(例：「金の指輪」)など、N1 と N2 の意味関係によっては「の」に相当する「的」を必要としないため、日本語の「N1+N2」において「の」が脱落する誤用が生じるとしている。

上記の手順で考えると、中国語以外の言語に関しても、2.2 で行った対照分析から次のような疑問がわくのではないだろうか。

(ｉ) A や V が N を修飾する際に、「の」に相当する独立した要素を必要としない母語(中国語以外)の学習者には、L2 日本語の習得過程で「の」の過剰使用が出現しないのか。

(ⅱ)「N1＋N2」構造において「の」に相当する要素を必要とする言語(英語など)を母語とする学習者には「の」の脱落が見られないのか。

(ⅲ)「の」に相当する要素を持っていてもその使用が日本語と異なる母語の学習者には、母語と同様な規則に沿った「の」の過剰使用あるいは脱落が見られるのか。

(ⅳ) タイ語やマレー語のように連体修飾構造の語順が異なる言語を母語とする学習者には、L2 日本語の習得過程で語順の倒置があるか。

1 章で述べたように「の」の過剰使用も脱落も L1 幼児の習得で観察されており、母語の転移からだけではこれらの現象を説明できない。また、言語転移には、学習者には困難な構造の使用を避けるという「回避」という目に見えない言語転移もある。一つの母語グループに属する L2 学習者の習得のみを観察するだけでは言語転移の真相解明は難しく、言語転移を言語転移と認めるのは容易ではないだろう。このように、母語の影響に関し、対照分析によって予測できることには限界がある。

Corder(1967)以降盛んになった誤用分析により、母語の違いに関らず L2 学習者に共通した誤用も生じること、また、L1 と L2 の習得過程においても類似の誤りが生じることが明らかになった。そして、Selinker(1972)以降様々な議論が展開された「中間言語[6]」という用語で示されるように、L2 学習者は独自の言語規則体系及び習得メカニズムを保有していることが示唆され、L2 習得は、学習者の L1、年齢、L2 レベルなど相互に関連する様々な要因が絡みあう複雑なプロセスであることが明らかになりつつある。このように、L2 における連体修飾構造の習得に関しても、普遍性か言語転移かという二者択一ではなく、学習者に共通して見られる発達過程(普遍性)はどこなのか、言語転移などの個別性によって左右される部分はどこなのか、といった多角的な観点(奥野 2003b)から捉えていく必要があると思われる。そのためにも、L1 習得研究からの示唆を踏まえた上で、L2 習得研究を概観するべきだと考える。Ellis(1994)は、L1 研究の成果を知ることは、学習者の言語発達パターンを研究するための有効な方法を提供してくれること、そして L1 の習得順序と道すじが L2 習得過程を考える上での基本となることから L2 習得研究を探る上で意義があることだと述べている。そこで、次章では連体修飾構造の習得に関して L1 研究の成果から L2 研究に示唆されること

を探るために、L1 研究から明らかになった「の」の過剰使用の要因の主な仮説及び連体修飾構造の習得過程を紹介したい。

3. L1 習得における研究

連体修飾構造における「の」の過剰使用は、L1 の言語発達、特に助詞の習得過程の研究において顕著な助詞の誤用として取り上げられている(永野 1960; 大久保 1967; Clancy 1985; 横山 1989 等)。従来の L1 研究で主な助詞は 3 歳ごろまでに初出すると言われていた(永野 1959; 大久保 1967 等)が、3 歳前では正用と誤用が同時に生産されることから、初出と習得は同一ではなく、幼児は 3 歳前では助詞の体系をまだ確実に習得していないことが横山(1989)の研究で示唆されている(横山 1990)。助詞の体系の習得過程を把握するには個々の助詞の習得過程が明らかにされなければならないとし、横山(1989)は、女児(10 ヶ月〜3 歳 3 ヶ月)の発話資料から、助詞について誤用の出現と消失の過程を観察した。そして、助詞の誤用はランダムにおこっているのではなく、置換、付加、削除、その他の 4 つの類型に分けられると特徴づけた。付加による誤用を整理した結果、連体修飾において修飾部の後に不要の助詞「の」を付属させる誤用が誤用例 95 中 80 例(84.2%)と非常に多く、また、大久保(1981)、岩淵・村石(1968)、野地(1973, 1974)等で報告されているように、IA に限らず NA や V、連体詞、指示代名詞、副詞にも「の」の付加の誤用が観察された。そこから「の」の付加が注目され、横山(1990)や伊藤(1993, 1998, 1999)によって連体修飾構造における「の」の過剰使用及び消失に焦点をあてた研究が 1990 年に入ってから行われるようになった。

次節では、L1 の連体修飾構造の研究を概観し、そこから明らかになったことを、発達のプロセス[7]と「の」の過剰使用の要因の 2 つの観点から論じたい。

3.1 L1 幼児の発達のプロセス

Clancy(1985)は、L1 幼児 5 名に対して言語習得の縦断的調査を行い得られた発話データに加え、大久保(1967)、藤原(1977)等他の研究者の発話調査データを分析し、L1 における連体修飾構造の発達段階を次のように報告している。

(ⅰ)N＋の[所有](「のりちゃんの」)

(ⅱ)「IA＋N」(「赤い車」)、「*N1+N2」(「*お姉ちゃんブーブー」)

(ⅲ)「N1＋の[所有]＋N2」(「よっちゃんのおちんちん」)→「N1＋の[その他]＋N2」(「大阪のおじさん」)、「*IA＋の＋N」(「*ちっちゃいのブーブー」)

(ⅳ)「*V＋の＋N」(「*うさちゃんが食べたのニンジン」)(例文は Clancy 1985: 459)

横山(1990)は、幼児 2 名の 10 ヶ月から 2 歳 11 ヶ月までの 27 ヶ月を縦断的に観察し得られた発話データの資料から、連体修飾構造の習得過程を分析した。そして、連体修飾構造における助詞「の」の誤用の初出から消失の過程を以下のようにまとめた。

(ⅰ)「IA＋N」は、一歳後半に初出し、その後も一貫して生産される。

(ⅱ)誤用は、正用の初出より 2〜3 ヶ月遅れて現われ、正用と共存した状態で生産される。

(ⅲ)誤用の出現頻度は 2 歳 3,4 ヶ月ごろまでが特に高く、その後は低くなる。それにともなって自己修正発話が現れる。

(ⅳ)その後、2 歳後半から 3 歳前半までに誤用は消失する。

この 2 名の幼児には初出や消失の時期的な違いは見られたが、IA の習得過程という点では共通性があると述べている。「NA＋N」及び「V+N」の習得に関しては、幼児 1 名のデータでは、「*変なの歌」のような「*NA＋の＋N」は「*IA＋の N」より遅く、「*お魚運ぶの冷凍庫」のような「*V＋の＋N」は「*NA＋の＋N」よりも遅れて出現した(例文は横山 1990: 5)。しかし、もう 1 名のデータには、調査期間中 NA 修飾が出現しなかったと報告している。また、自身の観察結果と、岩淵・村井(1968)、藤原(1977)、永野(1960)、村地(1973, 1974, 1977)等の観察結果を比較し、「の」の誤用は 1 歳後半から 3 歳前半の間で生じるようであるが、初出と消失時期にはかなり大きな個人差があると示唆した。また、IA による連体修飾規則は、(1)正用の段階→(2)正用と誤用の共存段階→(3)自己修正の段階→(4)再び正用の段階という 4 つの段階を辿って習得されると示唆している。

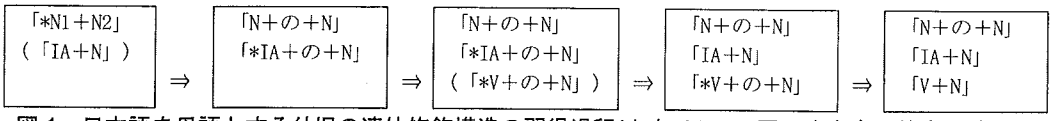

図１　日本語を母語とする幼児の連体修飾構造の習得過程(小山 2003　図１を参考に筆者作成)

一方、伊藤(1999)では、横山(1990)の研究結果と異なる結果を得た。伊藤は、1 歳 10 ヶ月及び 1 歳 11 ヶ月の幼児 2 名の発話の縦断的な観察資料及び、刺激絵を用いて連体修飾構造の発話を促して得られた資料を分析した。その結果、横山(1990)が示唆した上記の 4 つの段階のうちの第 2 段階、すなわち「IA+N」と「*IA+の＋N」の構造の共存段階は認められなかった。また、大久保(1967)が行った縦断調査では、「の」の過剰使用の出現が観察されなかった幼児も存在したことを挙げ、全ての子どもが前述の 4 つの段階を辿るわけではないことを示唆した。その他、伊藤(1999)では、連体詞、指示代名詞、V での「の」の過剰使用は観察されなかったこと、「*IA＋の＋N」構造に出現した IA は「大きい」、「小さい」という特定な語彙のみであったことが横田(1989, 1990)の観察結果と異なっていた。

上記の「の」の過剰使用の現象に加え、「の」の脱落の現象も観察されている。伊藤(1993)は、日本語の属格名詞句「N1＋の＋N2」に焦点をあて、1 歳 11 か月の女児の習得過程を 1 年以上にわたって縦断的に研究した。その結果、「N1＋の＋N2」の前段階として「の」が脱落した「*N1＋N2」の段階が存在することが観察された。

3.2 「の」の過剰使用の要因の仮説

L1 幼児の連体修飾構造に「の」の過剰使用の出現及び消失の現象が生じることが明らかになった。では、「の」の過剰使用はどのようなメカニズムで生じ、また消失するのだろうか。

永野(1960)は、「*IA+の＋N」(例：黄色いの花)は、「N+IA＋準体助詞『の』」(例：花　黄色いの)が語順倒置されたものだと考えており、この過剰使用の「の」を準体助詞[8]と見なしている。それに対し、Clancy (1985)は、L1 幼児の連体修飾構造の習得順序(3.1 参照)に基づき、「*IA＋の＋N」における「の」は、「N1＋の＋N2」における格助詞の「の」を過剰に IA の場合にも適用した結果であると考えている。横山(1990)は、Clancy と同様に「*IA＋の＋N」は「N1＋の＋N2」の格助詞「の」の過度の一般化の結果だとした。しかし、この解釈だけでは誤用の出現を十分説明できないとし、「IA＋準体助詞」の使用が格助詞「の」の過度の一般化の規則を促し、その適用範囲を制約する重要な要因として関与していると述べている。一方、Murasugi(1991)は、生成文法の言語理論の観点から、「の」は格助詞ではなく補文標識(Complementizer)であるという仮説を出している。これは、「*あおいのブーブー」は「*IA＋の＋N」ではなく、「関係節(あおいの)＋N(ブーブー)」とみなす。最初、子どもは日本語の関係節が CP(補文標識を主要部[9]とする句)であると仮説をたて言語を習得するが、肯定証拠に基づき、実は日本語の関係節が IP(屈折要素を主要部とする句)であることに気づき、CP 関係節に必要だった補文標識の「の」が喪失するという仮説である。

このように、過剰使用の「の」については、大まかに①「準体助詞」である、②「格助詞」である、そして、③「補文標識」である、という 3 つの考え方があるようである。伊藤(1998)は、「の」の統語カテゴリーをどのように捉えるかが「の」の過剰使用の出現、消失メカニズムを解明する鍵を握っているとし、L1 幼児の縦断調査のデータから 3 つの仮説の優劣を検討し、「の」は格助詞であるという仮説②が優れていると述べている。

3.3 本章のまとめ

以上から、L1 幼児における連体修飾構造の習得研究から示唆されたことは次のようにまとめられる。

まず、L1 の連体修飾構造の習得過程において、様々な品詞の修飾で「の」の過剰使用が生じることである。そして、出現の時期に個人差はあるものの、L1 幼児の連体修飾構造の習得過程全体は、図１[10]のようになると言えるだろう。「IA＋の＋N」段階の前に「IA+N」の段階があるかどうか、「*IA+の＋N」と「*V+の+N」が併存する段階があるかどうかなどは調査によって異なる事例が観察されているが、L1 幼児の連体修飾構造の習得過程は、修飾部の品詞別に N→IA→V の習得順序であることが示唆された。ただし、(1)正用の段階→(2)正用と誤用の共存段階→(3)自己修正の段階→(4)再び正用の段階という 4 つの段階を辿って習得されるかどうかは、更

なる調査を待たなければならない。今後、習得の過程を把握するために、IA だけでなく、日本語では IA と区別のある NA や V による N 修飾における「の」の出現と消失の詳しい調査が必要であろう。また、「の」の脱落した「*N1＋N2」の段階があるかどうかについても更なる調査が求められる。

「の」の過剰使用の要因については研究者によって様々な見解があるが、「の」が「格助詞」であるという仮説が有力であると考えられている。しかし、横山(1990)が示唆するように、「IA＋準体助詞」の使用が格助詞「の」の過度の一般化の規則を促し、その適用範囲を制約する重要な要因として関与している可能性もあり、要因が相互にからみあった複雑なものだと言えるだろう。

では、L2 の連体修飾構造の習得過程はどのようなものであろうか。L1 で示唆された習得順序などの発達プロセス及び、「の」の過剰使用の出現と消失のメカニズムとどのように類似あるいは相違しているのだろうか。次章では、L2 の連体修飾構造の習得過程についてみていきたい。

4. L2 習得における研究

本稿では、前章で明らかになった L1 の習得過程を踏まえつつ L2 習得の研究を概観する。表 3 からわかるように L2 の連体修飾構造の習得研究は少なく、その示唆に限界があることを前提とし、本章では、多様な属性を持つ L2 学習者に対して行った連体修飾構造の習得過程の研究を概観し、「の」の過剰使用が中国語からの母語の影響だけでなく L2 学習者に普遍的に見られる現象であること、そして、L2 習得は、学習者の L1、年齢、学習環境などが相互に関連する様々な要因が絡みあう複雑なプロセスであることを示唆したい。

表 3　調査対象者の年齢層

幼児・児童	成人
白畑(1993b) Iwasaki(2000) 李(2004)	白畑(1993a, 1994) Huter(1996) 迫田(1999) 山田・中村(2000) 岩崎(2000) 奥野(2001, 2002, 2003a) 金(2003) 桜木(2002) 齋藤(2001, 2002a, 2002b) 高橋(2001)

L2 学習者は、L1 幼児と比べ年齢、母語、学習環境などの多様性を持つ。L2 幼児の習得は年齢と学習環境の点で L1 習得と類似するが、L２成人の場合は様々であろう。そこで、L2 における連体修飾構造の習得過程に関する主な研究をまずは大きく調査対象者の年齢で分けて(表 3)各々を概観し、そこから明らかになった全体像を次章でまとめたい。

4.1 L2 幼児及び児童

L2 習得研究において幼児の調査は次の点で重要な意味を持つ。Ellis(1985)が指摘するように、幼児の L1 習得と成人の L2 習得とを比較する際の困惑の原因は年齢である。つまり、年齢により、学習者の身体的、認知的、情意的領域に違いが生じ、それが言語習得に影響するため、L1 習得と L2 習得の違いをより複雑にするからである。一方、幼児の L2 学習者は、一般的知能力において成人と比べ発達段階であるが、成熟に伴う生物学的制約が少なく、またすでに言語を一つ習得している状態の学習者である。よって、L2 幼児を調査することは L1 幼児の習得と L2 成人の習得のギャップを埋めるために意義あることだと考える。しかしながら、L2 の幼児を対象に行われた連体修飾構造の習得研究はほとんどなく、韓国人幼児を調査した白畑(1993b)と韓国人児童を調査した李(2004)のみである。Iwasaki(2000)の研究は、連体修飾構造における「の」に焦点をあてたものではないため本章で詳細に触れないが、英語を母語とする幼児の連体修飾節習得を縦断的に調査した結果、この幼児の連体修飾節にも「の」の過剰使用が観察されていた。このことから、「の」の過剰使用は、L1 幼児だけでなく L2 幼児及び児童の連体修飾構造の習得過程においても出現することが示唆されたと考えられる。

白畑(1993b)と李(2004)の両研究での被調査者の母語は韓国語(観察開始時には L1 における連体修飾構造は習得済み)であり、また研究方法も被調査者の発話を縦断的に調査している点で似ている。白畑は、自然会話と同時に絵カードなどを用いた誘導質問をしており、李は、誘導質問はしていないが発話量を増やすためにトピックを提示したり写真等を見せたりした。両研究の比較は表 4 の通りである。

4.1.1 L2 幼児及び児童の発達のプロセス

李(2004)は、調査対象者が来日後 5 ヶ月目から観察を始めたため連体修飾構造の初出の様相が観察されていないこと、及び、白畑(1993b)の研究では、

表4　白畑(1993a)と李(2004)の比較(李 2004を参照、筆者作成[1])

調査内容＼調査者		白畑(1999b)	李(2004)
被調査者	年齢と性別	調査開始時 4歳(男)	調査開始時 10歳(女)
	母語	韓国語	韓国語
	習得環境	自然習得	自然習得
	観察期間	滞在3ヶ月目～11ヶ月目(11ヶ月)	滞在5ヶ月目～16ヶ月目(12ヶ月)
結果	習得順序	滞在5ヶ月目〔「N1+の＋N2」、「*IA＋の＋N」〕→7ヶ月目〔「*IA+の＋N」、「IA+N」〕	調査開始時に〔「IA+N」及び「*IA+の＋N」〕、〔「V+N」及び「*V＋の＋N」〕が同時に出現
	Nによる連体修飾	「の」の脱落は、観察期間中0回	「の」の脱落は、観察期間中25回
	IAによる連体修飾	「誤用の時期」→「正用と誤用の共存時期」→「正用のみの時期」(滞在9ヶ月目に「の」の過剰使用が消失)	誤用のみの時期が観察されず、「誤用の共存時期」→「正用のみの時期」(滞在16ヶ月目に消失)
	Vによる連体修飾	滞在6ヶ月目に「の」の過剰使用が一回のみ観察され、その後正用(白畑1994)	「誤用のみの時期」→正用と誤用の共存期」→「正用のみの時期」
考察	言語転移	言語転移無し	負の転移有り

「NA+N」や「V＋N」の習得過程は詳細に観察されておらず未だ全体像は不明である。しかし、白畑の研究結果から「N1+の+N2」及び「IA+N」の習得過程に関しては次のことが言えると思われる。L2幼児も〔「N1＋の＋N2」、「*IA＋の＋N」〕の時期から〔「N1＋の＋N2」、「IA＋N」〕の段階へ移行している。これはL1習得の過程(図1参照)と似ており、L1幼児とL2幼児の習得順序が類似した可能性を示唆するものだと考える。この幼児は、L1幼児に観察されたような「*N1＋N2」の段階(4.2参照)が観察されないまま「N1＋の＋N2」が出現したこと、Clancy(1985)や横山(1990)のL1幼児のように「正用→誤用→正用」という過程(U字型発達：u-shaped development)を辿らなかった点が異なっている。同様に、李(2004)の児童にもU字型発達は見られなかった。白畑(1993b)が指摘するように、伊藤(1993)の調査対象児でも観察されなかったことから、U字型発達は母語習得の幼児全員に一定の期間はっきり現れる現象でもなさそうである。L2幼児・児童の習得がU字型発達を辿るかどうかに関して、今後の更なる観察データが必要であろう。今後、「NA＋N」や「V＋N」等の他の品詞も含めて分析を行うことにより、連体修飾構造全体の習得過程が明らかになることを期待する。

研究者自身が指摘しているように、上記の両研究は被験者数が1名の事例研究であり、この結果を一般化するのは難しい。また、奥野(2003b)が指摘するように、分析方法として自然会話と分析対象項目を誘導して収集した発話を一緒に分析していることは、状況的文脈の違いによる際が考慮されていないため問題があると考えられる。このように問題点はあるものの、L2幼児による連体修飾構造の習得過程が示唆されたこと、またL1習得の幼児と異なり被調査者が日本語のインプットに触れ始めた年齢は4歳及び10歳と遅いが、滞在16ヶ月目までに過剰使用の「の」が消失することが示された点は重要な発見だと考える。

4.1.2 「の」の過剰使用と脱落の要因

白畑(1993b)は、伊藤(1993)のL1習得研究の結果と同様に、「*IA＋の＋N」の前段階で「IA＋準体助

詞(例：小さいの)」及び「N＋IA＋準体助詞(例：めがね　黒いの)構造が出現しなかったこと、「の」の出現時期に複文が観察されなかったことから、「準体助詞仮説」及び「補文標識仮説」ではなく「格助詞仮説」を支持している。そして、もし L1 の構造を適用したのであれば、IA が N を修飾する構造において、「IA＋N」が習得の初期段階から発話されるはずだが、結果は「IA＋の＋N」の方が先行した。このこと及び韓国語の連体修飾構造の特徴から、この韓国人幼児の連体修飾構造における「の」の過剰使用には、母語からの影響はないと推測している。

李(2004)は、L1 習得研究で議論された仮説についての言及はなかったが、韓国語母語の転移の可能性を示唆している。IA＋N に比べ V+N において「の」の過剰使用が多く観察されたことから、修飾部が V の場合には韓国語話者の正の言語転移は支持されないとしている。むしろ、韓国語と日本語の日韓対照分析の観点から、韓国語は修飾部が A または V の場合に連体修飾のための語尾が存在する(2.2 参照)ことを指摘し、負の転移の可能性を予測している。

次に「N1＋の＋N2」構造における「の」の脱落について述べたい。韓国語の連体修飾構造は、表 1 の通り日本語と類似しているが、日本語の「N1＋の＋N2」はどんな意味関係においても「の」は義務的であるのに対し、韓国語ではそうではなく、また省略される場合が多いという点が異なっている。このことから、白畑(1993b)は、韓国語の特徴から、韓国人幼児に「の」の脱落した構造「*N1＋N2」が出現することが予測されるが、結果は一度も観察されなかったことから言語転移の可能性を否定したのに対し、李(2004)の調査では習得の初期に「の」の脱落が高頻度で観察されたことから、韓国語の言語転移の可能性を示唆している。しかしながら、「*N1+N2」構造は、伊藤(1993)が観察したように L1 幼児にも観察されており、言語転移かどうかを上記の研究からのみで議論することに疑問がある。

このように、転移に関しては不明な点が多く、転移があるとすればそれはどこに影響するのか(過剰使用においてなのか、脱落なのか)、負の転移なのか正の転移なのかなど疑問が多い。両研究とも韓国語を母語とする被調査者 1 名の事例であり、1 言語の事例から言語転移について言及するのは難しい。今後この言語転移を追求するために、韓国語だけでなく他の言語を母語にもつ調査対象者に対する多くの研究が必要であろう。また、白畑(1993b)と李(2004)の結果の相違が幼児と児童という年齢に起因するのか、来日時期が異なるためなのかなどの疑問に答えていくために、母語、年齢層、来日時期、学習環境などの個人要因を考慮に入れた事例研究の積み重ねが不可欠である。このように課題は残るものの、幼児の L2 習得の更なる研究は、成人の L2 習得研究では観察できない側面に光を当てることができるため重要だと考える。

4.2. L2 成人

L2 成人の連体修飾構造の習得に関しては、教室内習得者を対象にした研究がほとんどであり、教育現場と一番関連性が高いためここで詳細にとりあげたい。とりあげる主な研究は 8 つ(表 5)であるが、自然習得者を対象にした研究結果についても適宜触れる。調査対象者の母語は、中国語、英語、韓国語をはじめ、全部で 15 言語以上に上る。研究手法としては、主に被調査者の発話を縦断的または横断的に調査した研究が多いが、被調査者の知識を調査したものや書かれた資料を調査したものもあり、また、対象者の属性、調査目的や方法等は様々である。

各々の研究から示唆された点は多岐に渡るが、4.1 で L2 成人の発達のプロセスについて、4.2 では、連体修飾構造の習得に影響を与える様々な要因に絞って論じたい。

4.2.1 L2 成人の発達のプロセス

前章で、L2 幼児の習得過程は L1 幼児及び児童の習得過程と似ていると述べた。L2 幼児及び児童は、L2 成人と比べると、学習者の身体的、認知的、情意的領域等が L1 幼児に似ているため、習得過程が似てくるのも当然と言えば当然であろう。では、L2 成人の習得過程はどのようであろうか。

白畑(1993a, 1994)のタイ人(S1)及びマレーシア人(S2)に対する縦断的事例研究によると、来日前に日本語学習を受けていた S1 は観察当初から N、IA、V による連体修飾構造が同時に出現していたが、ゼロ初級の S2 は、N1 による N2 修飾の出現の後に、IA による修飾、そして V による修飾が出現していた。Huter(1996)は、英語母語話者 10 名の日本語の発達に関して縦断調査を行い、Processability theory[11]を援用して日本語の文法構造の初期の習得段階を示した。そして、連体修飾構造の習得過程は、N1 が N2 を修飾する段階で連体修飾構造の語順を

表５　連体修飾構造の主な研究(L2 成人・教室環境)

研究者	被調査者	レベル	調査方法及び分析資料	結果
白畑 (1993a, 1994)	タイとマレーシアの成人 計２名	ゼロ初級 と初級	縦断調査(来日後 18 ヶ月) ・発話資料 (自然会話＋誘導質問)	・出現順序「N＋の＋N」→「IA+の＋N」→「V＋の＋N」(L1 と同様)へ。 ・母語に関らず「の」の過剰使用が見られる。
Huter (1996)	①オーストリア在住の英語母語の大学生 10 名	記載無し(初級と思われる)	縦断調査 日本語の統語構造の習得調査 ・学期毎に行った絵の描写タスクからの発話資料	・「N1＋N2」修飾構造から連体修飾の語順を習得した後、IA(NA)や V による連体修飾構造を習得する。 ・誤用には、発達的誤りとそうでないものがあり、「の」の過剰使用は発達的誤りである。
迫田 (1999)	英・中・韓国語母語の成人 計 60 名	初級・中級・上級・超級(各 5 名)	横断調査 ・発話資料(KY コーパス)の分析	・母語に関らず「の」の過剰使用が見られる。 ・どの母語話者も中級レベルに「の」の過剰使用が多いが、上級レベルでは、「の」の過剰使用は中国語話者に多く見られる。 ・母語に関らず IA の連体修飾構造に「の」の過剰使用が多い。 ・誤用と正用が同時に観察される ・超級レベルでは「の」の過剰使用が消滅。 ・特定の名詞句パターンで誤用が多い。
岩崎 (2000)	アメリカ在住の英語母語話者 計 31 名	初級 15 名中級 10 名 上級 6 名	横断調査 ① 絵の描写のタスク ② メタ言語知識調査 ③ IA/NA の意味とグループ分けのタスク	・「の」「な」などの機能語は、初級では使わず、中・上級では過剰使用する傾向がある。 ・IA の連体修飾構造の習得過程に、正用→誤用→正用という U 字型発達が見られる。 ・NA は、レベルの向上に従い正用が増える。 ・正用率と文法規則の理解度はほぼ一致する。
山田・中村 (2000)	英・中・インドネシア・韓国・仏・独・タイ・インド・スウェーデン語 計 88 名	中級 50 名 中上級 38 名	縦断調査(各 15 週間) 作文での連体修飾構造の「の」の誤用の分析 ①中級：10 種類の作文 ②中上級：3 種類の作文	・全体に「の」の過剰使用より「の」の脱落の誤用が多い。 ・学習が進むにつれて誤用が増える。 ・誤用の種類・使用時期は母語によって異なる。 ・中国語話者は「の」の過剰使用の誤用は脱落より少ないながら、減る傾向がない。
奥野 (2001)	英・中・仏・独・西語母語の成人計 20 名	初級から上級	縦断調査 ・縦断的な 2 時点(来日直後と 10 ヵ月後)で収集した発話資料	・中国語話者は他の母語話者に比べ「の」の過剰使用が多い。 ・中国語話者は、中級レベルで見られなかったのに上級レベルの段階になって「の」の過剰使用が出現する現象が多く見られる。 ・「の」の過剰使用には、「～のほう」、「～のこと」のように特定の語彙と「の」を固まりで処理する学習ストラテジーとの関わりの可能性を示唆。
奥野 (2002, 2003a)	英・中・韓国語母語の成人 計 30 名	上級	横断調査 ① OPI 発話調査 ② 即時的処理を求める文法性判断テスト ③ 誤用訂正テスト	①より ・中国語話者に「の」の過剰使用が多い。 ・「感じ」や「ところ」などの抽象語彙「の」をひとかたまりで捉えている傾向あり。 ・V による修飾が他の品詞と比べ多

				い。 ②より ・V による修飾の場合の「の」の過剰使用には、中国語の負の転移と、韓国語の正の転移の可能性が高い。 ③より ・文法的な知識には、母語による差はない。
桜木 (2002)	英・中・韓・仏・西・ベトナム語・ポルトガル語・ベンガル語・パラオ語 計31名	中上級 (SPOT によって更にレベル分け)	横断調査 ・カードを使用した実験誘出法	・母語に関らず「の」の過剰使用が観察された。 ・レベルの低い学習者の方が「の」の過剰使用の出現が多い。 ・全体で IA の連体修飾において「の」の過剰使用が多いが、レベルの低い学生は複数の品詞にわたって観察される。 ・「もの」「こと」「ほう」「とき」などの特定の被修飾名詞が「の」とひとかたまりになっている可能性は低い。

習得し、その段階を経て形容詞句や動詞句の段階へ移行すると述べている。Huter は、この習得過程を普遍的な発達順序[12]とみなしている。発達順序か否かは今後の議論を待たなければならないが、L1 及び L2 幼児と同様に、L2 成人も連体修飾構造を N→IA→V の順序で習得していくことが示唆されたと思われる。

一方、白畑は、「*N1＋N2」が単独で発話される期間はおそらくなく、かなり頻度は低いが「*N1＋N2」が「N1＋の＋N2」と長期間(18 カ月間)併用されことを L1 と L2 の相違点として挙げている。また、相違点として、被調査者の「の」の過剰使用が観察期間中消失せず、また「の」の過剰使用に対して明示的な訓練をしても効果がなく、「*V＋の＋N」の構造が一番化石化しやすいとしている。

4.2.2 習得に影響を与える様々な要因

L1 及び L2 幼児の習得研究において、「の」の過剰使用の要因には「格助詞」の過剰般化という説があることは今までに述べてきた。それに加え、奥野(2003b)は、NA と N の区別の混乱、学習者の言語処理ストラテジー及び、言語転移などの諸要因が複合的に関与する可能性を示唆しており、ここから L2 習得の複雑なプロセスが伺われる。そのような L2 習得のプロセスの複雑さを示すために、学習者の日本語レベル、言語転移、特定語彙と「の」の結びつき、知識と運用、学習環境の 5 つの側面をとりあげ以下に紹介したい。

4.2.2.1 日本語のレベルと「の」の過剰使用

迫田(1999)は、KY コーパス[13]を用いて韓、中、英語話者 60 名(初、中、上、超級：各 5 名)の「の」の過剰使用に関する横断研究を行った。その結果、「の」の過剰使用は初級レベルから出現し、母語に関らず中級レベルの学習者に多かった。中国語話者は他の母語話者と比べて上級になっても「の」の過剰使用の誤用が多いという特異な傾向があることを示唆し、これが中国語の母語の影響かどうかは今後の調査を必要とするとした。超級レベルになるとすべての母語グループでも「の」の付加の誤用は消滅していることが観察された。

奥野(2001)は、迫田の研究を受けて、OPI 判定に基づく初級から上級までの 20 名の学生(中、英、仏、独、西語話者)に対して縦断的な 2 時点(来日直後と 10 ヶ月後)で収集した発話を分析した。その結果は、迫田と同様に、母語に関らず中級レベルに「の」の過剰使用が多かった。中国語話者は、他の母語話者に比べ全体的に「の」の過剰使用が多く、中級レベルでは「の」の過剰使用が見られなかった被調査者も上級レベルの段階になってから出現するケースや、複数の品詞にまたがって「の」の過剰使用が観察された。

山田・中村(2000)は、15 週間の間に中級レベルの学生 50 名によって書かれた作文 10 種類と、中上級に進んだ学生 38 名によって書かれた 3 種類の作文の中に見られる連体修飾構造の「の」の誤用を分析した。その結果、全体的に誤用は「の」の過剰使用より脱落の方が多く、中国語話者も同様であるが、「の」の脱落は中上級になる減少するのに対し「の」の過剰使用は減る傾向が見られなかった。中

上級に進むと母語によって、「の」の脱落や過剰使用が増えるグループと減るグループがあり、母語によって誤用の種類や使用された時期に違いがあることが示唆された。

以上の迫田・奥野の発話調査の結果から、母語に関らず「の」の過剰使用は中級レベルに多く、中国語話者は上級になっても「の」の過剰使用が多く観察されることがわかる。一方、書き言葉を分析した山田の結果でも、中国語話者の「の」の過剰使用は他の母語話者に比べてなかなか消失されないことが示唆されている。しかし、レベルの上昇に従って消失していく傾向があるかどうかや、「の」の過剰使用と脱落との関わりについては、更なる研究を必要とする。山田により、全体の傾向として「の」の脱落の方が「の」の過剰使用より多いこと、中級から中上級へのレベルの変化では、「の」の脱落と過剰使用の増減は母語グループによって異なるという指摘もあり、この違いが発話と書き言葉という分析対象の違いに起因するのか、調査対象者の母語の違いのためなのかなどはまだ明らかになっていない。

4.2.2.2 言語転移

奥野(2002, 2003a)は、奥野(2001)で示唆された上級レベルの学習者の「の」の過剰使用における言語転移の可能性を追求するために、中・韓・英語を母語とする OPI 上級学習者各 10 名に対し、①OPI 発話調査→②即時的処理を求める文法性判断テスト→③誤用訂正テストを行った。この一連の研究は、迫田や奥野(2001)の研究が全て発話調査の資料のみに基づいているため、発話内容によって使用される連体修飾構造に個人差がでている可能性を防ぐためのものである。

①の OPI の結果では、上級レベルになっても他の母語話者と比べて中国語話者に「の」の過剰使用が多く見られ、「感じ」や「ところ」のような具体的な意味を持たない抽象語彙と「の」を固まりで結びつける学習者特有のストラテジーも高い割合で観察された。また、中国語話者は他の品詞と比べて V による N 修飾において「の」の過剰使用が一番多いことを中国語の負の転移によるものだと推測しつつも、個人内の品詞自体の使用頻度の違いがあることや、上級になると動詞を用いた連体修飾構造自体が多く使用される(奥野 2003b)傾向があるため、「V+N」において「の」の過剰使用が多く出現した点にも考慮している。

②の調査の目的は、文法性判断に基づいて中国語話者に多く見られるという言語転移の可能性について、母語及び品詞による違いを明らかにするものである。調査結果から、特に V による修飾の場合の「の」の過剰使用には中国語の負の転移及び韓国語の正の転移が関っている可能性が高いこと、中国語話者は、中国語の連体修飾構造の影響(2.2 参照)で修飾部の品詞に拘らず「の」をより使用する可能性が高いことが示唆された。また即時的な処理を求めるテストであったことから、言語転移は即時性が高い状況において見られる可能性も示唆された(奥野 2003a)。

③の結果から、被調査者が有する文法的な言語知識には母語による差がなく、成績も高いことが認められた。つまり、このことは、どの母語話者でも上級レベルでは知識としては理解できているということである。それにもかかわらず、実際の言語運用場面では他の母語話者に比べて中国話者に「の」の過剰使用が多く見られる。これについて、奥野(2002)は、「運用面での自動化された言語処理[14]の過程において、言語転移が作用していることを示している」と考えている。

その他、語順に対する母語の影響については、白畑(1993a, 1994)が、修飾語と被修飾語の語順が日本語と逆になる構造が観察されたことからこれを言語転移と見なしている。しかし、出現したのは一回のみであり、また L1 幼児の習得にも、日本語母語話者の発話にも語順倒置は起こるため転移かどうかは明らかではない。更なる調査が必要であろう。

4.2.2.3 特定語彙と「の」との結びつき

迫田では、学習者が「～のほう」「～のこと・～のもの」、奥野では「～のとき」「～のために」「～のほう」「～のような」といった特定の語彙と「の」が一固まりで処理されるため、IA／N や V による連体修飾にもそれが用いられるという言語処理ストラテジー[15]が「の」の過剰使用と関っている可能性を示唆した。それに対し、桜木(2000)は、迫田や奥野が「の」の過剰使用を特定の語彙との結合関係から考察している点を評価しつつも、分析データが発話資料であるため、発話内容によって現れた連体修飾に個人差が出ている可能性を指摘した。そして、特定の被修飾名詞にどのような修飾語が使用されうるかを調査するために、韓・中・英・西・ベトナム・ポルトガル・パラオ語を母語とする計 31

名の中上級の学生(SPOT によるレベル分け)に、カードに書かれた被修飾名詞を用いて修飾語を誘出するタスクを行った。その結果、先行研究で挙げられた特定の語彙には正用と「の」の過剰使用の形が同時に観察されたことから、特定の語彙と「の」を結びつけるストラテジーは支持できないと述べている。また、誘出された修飾語の品詞別の傾向としては、学習者のレベルが低い段階では複数の品詞に「の」の過剰使用及び正用が観察されるが、全体的には「の」の過剰使用は IA に多く、更に IA の「大きい」「小さい」の 2 語に多かった。カード提示の被修飾語から「の」の過剰使用の傾向を見てみると、被修飾名詞によっては連体修飾が作成できない語(文脈性の強い「場合」や「ほう」等)が見られたが、「の」の過剰使用と正用が同時に見られる被調査者が多かったとしている。

以上の桜木の研究は、被修飾部と修飾部の結びつきを詳細に調べた点で意義があると思われるが、得られた示唆は追検討が必要だと思われる。まず、先行研究で挙げられた特定の語彙には正用と「の」の過剰使用が同時に観察されたことから、特定の語彙と「の」を結びつけるストラテジーは支持できないと述べているが、桜木も指摘するように、使用しているか否かのみを見ており、使用数を見ていないため正用と誤用の割合は不明である。また、抽象的な文脈に依存する語(「～ほう」「～場合」など)はタスクによって修飾語を誘出するのが難しく連体修飾を作成できたものが少なかったというのも結果に影響すると思われる。今後、言語処理ストラテジーの使用実態の解明には、先行研究で挙げられた特定な語彙がどのような被修飾語と結びつくのかもあわせてみていく必要があるだろう。

4.2.2.4 知識と運用

岩崎(2000)は、英語母語の日本語学習者 31 名(初級 15 名、中級 10 名、上級 6 名)に対して行った、①絵の描写タスク、②メタ言語知識調査、③IA/NA の意味とグループ分けのタスクの 3 つの調査から学習者の IA と NA の知識と運用を調査した。②では、実際に存在しない 4 つの IA と NA のような語を用いその文法規則に関する質問をし、その正答率と①の結果を比較した。その結果、絵のタスクにおける正用率と文法規則の理解度はほぼ一致していた。また、日本語能力を問わず、一部の語を除いてどの被調査者もかなり正確に IA と NA の語をグループ分けできていた。このことから、連体修飾構造における「の」の過剰使用や IA/NA の否定形などの誤用は、IA が IA として定着していないことから起こるより、文法規則を理解していないことから生じるほうが多いと結論付けている。また、文法規則を理解していても誤用が生じることも明らかにした。これは、奥野(2002, 2003a)で示唆された、上級の中国語話者は他の母語話者に比べ、知識としては理解できているのに実際の言語運用場面では言語転移の影響から「の」の過剰使用が多く見られることと共通している。本稿では詳しくとりあげなかったが、金(2003)は、連体格助詞「の」の正用と脱落による誤用の分別から、中級及び上級学習者の文法知識が非常に不確定であること、会話などの即時性を要求される状況では知識の不確定により誤用を生じやすいことを推測しており興味深い。今後、学習者の「運用」と「知識」にどれくらいのギャップがあるのか、それがどう習得と関るのかの調査が期待される。

4.2.2.5 学習環境

自然習得者を対象にした研究は、インプットだけでどのくらい言語を習得できるかを示すとともに、教育の役割効果を示唆するものとして重要だと考える。日本には自然環境で日本語を習得している学習者がかなり多くいるといわれているが、自然習得についての研究は少ない。奥野(2003b)でも今後の研究課題として挙げられているように、自然習得者の連体修飾構造の研究はほとんどなされておらず、英語母語話者を対象に行った高橋(2002)と、「の」の過剰使用を中心とした研究ではないが、ロシア母語話者とフィリピン人の学習者に対し連体修飾節[16]の習得に関する研究を行った斎藤(2001, 2002a, 2002b)しか見当たらない。

斎藤(2001)は、滞在暦 2 年のロシア語を母語とする自然習得者(OPI レベル：初級上→中級下)の連体修飾節の習得過程に対する縦断調査(10 ヶ月)した。続いて、斎藤(2002a)では、日本滞在暦 4 年～13 年のフィリピン人 5 名を対象に連体修飾節の習得過程を調査した結果、どの被調査者にも「の」の過剰使用が観察された。また、連体修飾(「V+N」)での「の」の過剰使用は少なく、「IA＋N」構造において多く観察されたこと(斎藤 2002b)を報告している。

高橋(2002)は、日本に長期間(約 10 年)滞在する英語母語話者 4 名(およそ初級後半から中級レベル)における連体修飾構造の習得過程を調査した。言語規

則の指導を一度も受けたことがなく自然環境で日本語を習得している者2名と、来日初期に指導を受けたことのある者2名の縦断的な2時点において収集した発話データを比較・分析した。指導を受けた経験のある被調査者に比べ、自然習得者の連体修飾構造に「の」の過剰使用がかなり高い頻度で観察されたことから、連体修飾構造が自然環境でのインプットからだけでは習得しにくいこと、自然習得者の連体修飾構造の習得の速度は教室内学習者と異なる可能性を推測している。これは、Pica(1984)の、指導を受けた者のほうが過剰般化を早く消失するという示唆を支持する結果と考えられる。「の」の過剰使用の全体的な傾向は、「V＋の＋N」や「NA＋の＋N」の方が「IA＋の＋N」より多かった。これは、迫田(1999)や斎藤(2000a)等の「IA＋の＋N」の誤用が多いこととは異なる結果となった。

斎藤と高橋の調査は全て発話調査のため、使用語彙は会話の内容に影響を受ける可能性が高い。「の」の過剰使用がどの品種の連体修飾に多いかは、被調査者の母語や学習環境等の相違に着目した今研究が今後必要だろう。両研究とも自然習得者の初級から縦断的に調査したものではなく、習得順序や「の」の初出や出現は不明である。今後、「の」の過剰使用及び脱落の出現と消失時期を含めた連体修飾構造の習得順序に関しての研究が望まれる。また、教室習得の様相と比較するために、言語転移や学習者の言語処理のストラテジーを詳細に調査することは、学習者の習得のメカニズムを知るために有益だと考える。

4.3 本章のまとめ

L2幼児及び児童、成人のL2教室学習者及び自然習得者の連体修飾構造の習得研究から得られた結果を、「の」の過剰使用を中心に個別性（L1及びL2の相違性）と普遍性（L1及びL2の共通性）の観点からまとめると次のようになる。

＜普遍性＞

(ⅰ)連体修飾構造の「の」の過剰使用は、学習者の年齢、母語及び学習環境に関らず観察される現象である

(ⅱ)L2 学習者の連体修飾の習得順序は、「N1 の N2 修飾」→「IA の N 修飾」→「V の N 修飾」であり、L1の習得順序と類似している

＜個別性＞

(ⅲ)L2 幼児・児童は、「の」の過剰使用が滞日16ヶ月目には消失している

(ⅳ)L2 成人の自然習得者(英語母語話者)には、滞在10年以上であっても「の」の過剰使用が消失しない者もいる

(ⅴ)L2 成人では、母語に関らず中級レベルに「の」の過剰使用が多い

(ⅵ)中国語を母語とする L2 成人の「の」の過剰使用には母語が影響している

このような、連体修飾構造の習得における普遍性と個別性の側面が明らかになったことは習得過程の把握のために意義あることである。ここで、再度この普遍性と個別性について考えてみたい。なぜ「の」の過剰使用が生じるのかという疑問に答えるには、小山(2003)は、この現象を個別の現象ではなく、言語習得のプロセスの中に位置づけて考える必要性を主張している。つまり、母語や年齢、学習環境などといった個別的な要因でなく、普遍的な習得のメカニズムの働きによって「の」の過剰使用が生じるということである。

では、母語は L2 習得に影響しないのだろうか。上記の研究結果から、中国語話者は他の母語話者に比べて「の」の過剰使用が多く、また上級になってもなかなか消失しないという結果が出ているが、これは母語の転移ではないのだろうか。この疑問に対し、小山は次のように述べている。「誤用の原因は母語ではないが、誤用の克服を妨げているのは母語である」(小山 2000: 48)。つまり、これは、学習者の母語は習得の「順序」には影響を与えないが「速度」には影響を与えるということである。

この「速度」に影響を与えるものとして、小山が述べた母語に加え、筆者は年齢と言語規則の指導の有無(学習環境)も挙げたい。ここまで L2 幼児及び児童、L2 成人の教室学習者と自然習得者の研究を概観してきてわかったことは、L2幼児のIAによる連体修飾構造における「の」の過剰使用は滞日 9ヶ月で消失している(白畑 1993b)が、L2 児童は滞日 16ヶ月目で消失している(李 2004)ことである。更に L2 成人の教室学習者は滞日 18 ヶ月目でも「の」の過剰使用が観察されている。このことから、「の」の過剰使用の消失には年齢が関係する可能性が考えられる。また、成人の教室学習者は、幼児や児童よりも遅いだろうが、超級になると「の」の過剰使用は消失している(迫田 1999)のに対し、自然習得者は滞日 10 年以上でも依然高頻度で観察され

ている。このことは、「の」の過剰使用の消失、すなわち習得の「速度」に対する指導の効果の可能性を示唆するものと考えられうる。ただし、調査対象となった OPI の学習者の学習環境、年数、滞日暦等は明確ではなく、その中に自然習得の学習者が含まれている可能性があること、本稿でとりあげた自然習得者を対象にした研究は事例研究であり、その結論は一般化できないことを踏まえた上での比較であることを断っておきたい。

この他に、前述したように研究者によって一致した見解は見られていないものの、「の」の過剰使用の要因として、学習者の言語処理ストラテジー、文法規則の知識の有無などの諸要因が複合的に関っていることが指摘されており、言語転移の様相とともに多角的に検証されることが望まれる。

5. おわりに

本稿では、L1 幼児及び、日本語を L2 として学ぶ幼児及び成人の連体修飾構造の習得過程と「の」の過剰使用の研究を概観してきた。連体修飾構造における「の」の過剰使用は L1 習得にも見られ、L2 学習者の年齢、母語、学習環境に関らず見られることから、「の」の過剰使用の出現は普遍的な習得のメカニズムの働きによって生じることが示唆された。また、連体修飾構造の習得順序は、L1 及び L2 学習者共に、N による連体修飾を習得した後、IA/NA による連体修飾、次に V による連体習得である可能性も示唆された。一方、「の」の出現や習得順序の普遍性と同時に、「の」の過剰使用の消失、つまり、習得の速度は学習者の母語、年齢、学習環境に影響を受けうることが示唆されたと考える。1 章で述べたように連体修飾構造の研究は習得のメカニズムの解明及び教育現場への還元のために重要だと考えるが、しかし、連体修飾構造の習得研究は L1・L2 を含め非常に少なく、被調査者も限られている。また、事例研究も多いため、研究から得られた示唆を一般化するには更なる研究を必要とする。特に L2 習得のプロセスは複雑なため、前述したように学習者の日本語レベルや学習環境、母語などの関りを多角的に検証していく必要がある。また、本稿では詳しく取り上げられなかった「の」の脱落と過剰使用との関りの解明も今後の重要な課題であろう。それらに加え、次の 4 点を今後の研究課題として提示したい。

第一点に、習得順序を含む発達のプロセスの研究についてである。習得過程で (1)正用の段階→(2)正用と誤用の共存段階→(3)自己修正の段階→(4)再び正用の段階といった、U 字型発達を辿るかどうかは研究者によって異なり、更なる調査を待たなければならない。また、L2 学習者の被調査者は L1 幼児の習得研究と異なり、日本語のインプットを受け始めた時期から研究することは難しいが、連体修飾構造の習得過程全体の把握に向けて、特に過剰な「の」の初出及び消失の様相を明らかにするための長期的な縦断研究が期待される。白畑(1994)では、L1/L2 幼児と比べ成人の連体修飾構造の「の」が 18 ヶ月で消失しなかった現象を化石化と述べている。ところが、3.1 で示唆されたように L1 幼児においても初出と消失には大きな個人差があり、18 か月以内で消失しなかったことが化石化の現象と言えるのかどうかは、初出と消失に関しての長期的な観察が必要であろう。韓国語以外の母語を持つ L2 幼児・児童、特に言語転移が示唆されている中国語話者の幼児の習得研究が望まれる。また、今後、先行研究が行われた英・中・韓語話者の横断研究の結果と比較するためにも、前述の奥野(2001)の縦断研究で調査されていない韓国語話者(L2 成人)に対する縦断的研究が期待される。

第二点に、「の」の過剰使用に対する特定の語と「の」を一固まりとして捉える言語処理のストラテジーの関与の可能性についてである。「～のとき」「～のところ」などの特定の語と「の」を結びつけてパターンを形成することは連体修飾構造の習得においてだけでなく、「コソア」など他の文法項目の習得においても観察されることが明らかになっている(森塚 2003)。迫田(1999)も指摘するように、これが真に学習者にとってのストラテジーかどうかは追求する必要がある。そして、このような固まりで言語を処理することが習得とどう関っていくのかはまだ不明な点が多く、今後の重要な課題と考える。

第三点に、連体修飾構造の習得と修飾部の品詞との関りについてである。「の」の過剰使用は、「IA＋N」において多いという結果と「V+N」に多いという結果があり、どの品詞の連体修飾において「の」の過剰使用が多く出現するのかは研究者によって異なる。また、IA に比べ NA の連体修飾構造の習得に関しても研究が進んでいない。今後、個人内の品詞自体の使用頻度の違いや、連体修飾構造全

体の使用傾向も考慮し、各品詞における言語転移に関して詳細な調査が必要であろう。

第四点に、指導の効果についてである。「の」の過剰使用に対する指導の効果に関し、白畑(1994)は、L2 の成人学習者に対して明示的に「の」の誤りを指摘して訓練しても十分な効果がなかったと述べている。それに対し、高橋(2001)は、自然習得者と教室学習者を比較し、指導を受けた者のほうが過剰般化を早く消失する可能性を推測しており、これらの研究結果からでは指導の効果は明らかではない。しかし、向山(2003)は、連体修飾構造の研究ではないが、調査項目として連体修飾を用い、コミュニケーション重視の授業において明示的文法指導と暗示的文法指導の効果を調査した。そして、明示的文法指導の方が効果が高い可能性を示唆した。また、岩崎(2000)は、連体修飾構造における「の」の過剰使用は学習が進んでいる証であり、IA の習得に見られる U 字型発達の「誤用」の段階で化石化が起こらないよう、文法導入後に度重なる復習をすることを提案している。このように、連体修飾構造の習得における指導の効果を調査することは、教育現場への貢献という点で重要だと思われる。母語やレベル、学習環境などが異なる被調査者に対して明示的な指導を行った場合、「の」の過剰使用の消失が早まるか否かといった研究も必要だろう。

注

1. この現象を「の」の過剰生成、または「の」の付加と呼ぶ研究者がおり、本稿では全て同義として使用する。
2. 本稿では、研究者によって定義が異なる「習得」と「獲得」及び、「習得」と「学習」を区別せず、すべて「習得」という用語を用いる。
3. 母語やそれ以外にこれまで学習した言語と、目標言語の類似点及び相違点から、学習者の意識的・無意識的な判断により、目標言語の運用上や習得の過程上に現れる影響のこと(奥野 2003b)。
4. 国語学で言うところの「形容詞」。名詞が後ろに来るときに「～い」という形(例：「赤い車」)をとる。
5. 国語学で言うところの「形容動詞」。名詞が後ろに来るときに「～な」という形(例：「有名な話」)をとる。
6. 詳しくは、長友(1993)を参照。
7. プロセスを「習得順序と習得の成立の仕方に関連する要因」(エリス 1995)と関連するものとする。
8. 前に出てきた名詞をそのまま繰り返さないで名詞を置き換える、名詞の代わりをする「の」のこと(例：それは私のです)。
9. 主要部(head)：統語的に句の中心となる要素。日本語は主要部が厳密に句の最後に来る言語である〔例：私の本、おもしろい本、昨日読んだ本〕。(三原 n1994)
10. 白畑(1993a)の提示した順序図では、「*IA+の＋N」「*V+の+N」が併存する段階がなく全体で 4 段階になっているが、Clancy(1985)にも「*IA+の＋N」「*V+の+N」が併存する段階が報告されているため、本稿では小山(2003)に倣って 5 段階図を紹介する。
11. 「それぞれの言語発達段階において学習者が言語処理可能な文法構造を予測する理論」(峯 2002)
12. 母語や学習環境に関らず同じもので、一般に習得順序と区別される。詳しくは、白井(2000)、大関・谷内・森塚・遠山・佐々木(2000)を参照。
13. 90 人分の OPI テープを文字化した言語資料。詳しくは、鎌田(1999)を参照。
14. 人間の情報処理過程には、□処理過程が習慣化され自動化されていて、注意を払う必要がない自動処理(automatic processing)と、注意を払いながら処理を行う統制的処理 (controlled processing)の二つがあり、流暢な言語表出において統制的処理を受けるのは意味的な面であって、言語的な処理は自動化されているという仮定がある。(山岡 1997)。
15. 迫田(1999)では、これを「ユニット形成のストラテジー」、奥野(2001)では「固まり」と呼んでいる。
16. 「日本語における名詞を修飾する節」(齋藤 2002)

参照文献

李光輝 (2003)「日本語と韓国語における連体修飾の「ノ」と「의 ui」の対照」『日本語教育学会秋季大会予稿集』59-64.

李惠淑 (2004)「韓国人児童の『の』の習得過程に関する縦断研究－『の』の過剰使用と脱落を中心に－」お茶の水女子大学修士論文

伊藤友彦 (1993)「『名詞＋名詞』から『名詞＋ノ＋名詞』への移行」『静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学編)』43, 157-163.

伊藤友彦 (1998)「過剰生成される『ノ』の統語カテゴリー－幼児一例の縦断研究－」『東京学芸大学紀要 1 部門』49, 143-149.

伊藤友彦 (1999)「幼児 2 例の生じた『ノ』の過剰生成の出現・消失のメカニズム」東京学芸大学紀要 1 部門』50, 159-168.

庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘 (2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』松岡弘(監) スリーエーネットワーク

井口厚夫・井口裕子(1994)『日本語文法整理読本(解説と演習)』名柄迪(監) バベル・プレス

市川保子 (2000)『日本語誤用例文小辞典』凡人社

岩崎典子 (2000)「形容詞・形容動詞の知識と運用－文法規則習得か語彙習得か－」『日本語教育学会春季大会予稿集』87-92.

岩淵悦太郎・村石昭三 (1968)「言葉の習得」『言葉の誕生』岩淵(編) 日本放送出版協会

大関・谷内・森塚・遠山・佐々木 (2003)「第二言語習得研究とは何か？－白井恭弘講演記録解説－」『第二言語習得・教育の研究最前線－2003 年度版－言語文化と日本語教育 2003 年 11 月増刊特集号』17-28.
大久保愛 (1967)『幼児言語の発達』東京堂出版
奥津敬一郎 (2004)「連体修飾とは何か」『日本語学』23(3), 6-17.
奥野由紀子 (2000)「第二言語習得における言語転移の認証—先行研究からの課題—」『教育学研究紀要』46(2), 384-389.
奥野由紀子 (2001)「日本語学習者の「の」の過剰使用の要因に関する一考察－縦断的な発話調査に基づいて－」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部 50, 187-195.
奥野由紀子 (2002)「『の』の過剰使用における言語転移の可能性－上級学習者の誤用訂正テストと発話調査に基づいて－」『第 13 回第二言語習得研究会全国大会予稿集』77-82.
奥野由紀子 (2003a)「上級日本語学習者における言語転移の可能性—『の』の過剰使用に関する文法性判断テストに基づいて－」『日本語教育』116, 79-88.
奥野由紀子 (2003b)「第二言語としての日本語習得過程における言語転移の研究－『の』の過剰使用を中心として－」広島大学大学院博士論文
小野沢純 (1998)『基礎マレーシア語』大学書材
鎌田修 (1999)「KY コーパスと第二言語としての日本語の習得研究」『第二言としての日本語の習得に関する総合研究』平成 8 年度～10 年度科学研究費助成金研究成果報告書 237-237.
金玄珠 (2003)「韓国人日本語学習者の中間言語に見られる不確定性－連体格助詞の正用と脱落による誤用に関するテスト－再テスト調査に基づいて－」『第二言語習得研究会全国大会予稿集』86-91.
小山悟 (2003)「連体修飾構造の習得における母語の影響について：過程的転移としての『の』の過剰使用」『日本語教育論集』19, 41-53.
齋藤浩美 (2001)「初級日本語学習者の複文構造の習得過程に関する縦断的研究」お茶の水女子大学修士論文
齋藤浩美 (2002a)「自然習得中心の学習者における連体修飾節の習得過程－NPAH 及び状態性の観点から－」『第二言語としての日本語の自然習得の可能性と限界』平成 12～13 年度 科学研究費補助金研究 萌芽的研究 研究成果報告書 課題番号 12878043 (お茶の水女子大学), 82-101.
齋藤浩美 (2002b)「連体修飾節の習得に関する研究の動向」『第二言語習得・教育の研究最前線－あすの日本語教育への道しるべ－言語文化と日本語教育 2002 年 5 月増刊特集号』45-69.
桜木ともみ (2002)「日本語学習者の名詞修飾における「の」の過剰使用」『教育学研究紀要』48(2), 323-328.
迫田久美子 (1999)「第二言語学習者による「の」の付加に関する誤用」『第 2 言語としての日本語の習得に関する総合研究』科学研究補助金研究成果報告書 327-334.
白井恭広 (2003)「第二言語習得研究とは何か？」『第二言語習得・教育の研究最前線－2003 年度版－言語文化と日本語教育 2003 年 11 月増刊特集号』2-16.
白畑知彦 (1993a)「連体修飾構造習得過程における化石化現象」『平成 5 年度日本語教育学会春季大会予稿集』55-59.
白畑知彦 (1993b)「幼児の第 2 言語としての日本語習得と「ノ」の過剰使用—韓国人幼児の縦断研究—」『日本語教育』81, 104-115.
白畑知彦 (1994)「成人第 2 言語学習者の日本語の連体修飾構造習得過程における誤りの分類」『静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学編)』44, 175-190.
高橋織恵 (2001)「長期滞在者の日本語習得に関する事例研究—その限界と可能性—」お茶の水女子大学修士論文
張麟声 (2003) 『日本語教育のための誤用分析－中国語話者の母語干渉 20 例』スリーエーネットワーク
長友和彦 (1993)「日本語の中間言語研究—概観—」『日本語教育』81, 1-18
長友和彦 (1998)「第二言語としての日本語の習得研究」橋口英俊・稲垣佳代子(編)『児童心理学の進歩 1998 年度版』金子書房 79-110
永野賢 (1960)「幼児の言語発達—とくに助詞「の」の習得過程について」『関西大学国文学会　島田教授古希記念国文学論集』405-418.
西山佑司 (2004)「名詞句の意味と連体修飾」『日本語学』23(3), 18-27.
野地潤家 (1973)『幼児期の言語生活の実態□』文化評論出版
野地潤家 (1974)『幼児期の言語生活の実態□』文化評論出版
野地潤家 (1977)『幼児期の言語生活の実態□』文化評論出版
藤原与一 (1977)『幼児の言語表現能力の発達』文化評論出版
藤田直也 (2000)『日本文法　学習者によくわかる教え方—10 の基本－』アルク
水野義道 (1993)「日本語の『の』と中国語“的”」『日本語学』12(10), 72-79.
三原健一 (1994)『日本語の統語構造－生成文法理論とその応用－』松柏社
峯布由紀 (2002)「Processability theory に基づいた第二言語習得研究」『第二言語習得・教育の研究最前線－あすの日本語教育への道しるべ－言語文化と日本語教育 2002 年 5 月増刊特集号』28-43.
村野孝次 (1968)『幼児の言語発達』培風館
向山陽子 (2003)「コミュニケーション重視の授業における明示的文法指導と暗示的文法指導の効果」お茶の水女子大学修士論文
森塚千絵 (2003)「日本語の指示詞コソアとその習得研究

の概観」『第二言語習得・教育の研究最前線－2003 年度版－言語文化と日本語教育 2003 年 11 月増刊特集号』51-76.

山岡俊比古 (1997)『第二言語習得研究』桐原ユニ

山田真理・中村透子 (2000)「連体修飾の『の』に冠する中級学習者の習得状況とストラテジー」『日本語教育学会秋季大会予稿集』93-98.

横山正幸 (1989)「幼児による助詞の誤用の出現時期と類型」『福岡教育大学紀要』38, 225-235.

横山正幸 (1990)「幼児の連体修飾発話における助詞「の」の誤用」『発達心理研究』1(1), 2-9

Clancy, P, M. (1985) The Acquisition of Japanese, In I.D. Slobin (Ed.), *The Cross Linguistic Study of Language Acquisition (Vol.1)*, Lawrence Erlbaum Associate Publishers. Hillsdale; New Jersey, 373-534.

Comrie, B. (1989) *Language universals and linguistic typology; syntax and morphology*, Oxford:Blackwell.(松本克己・山本秀樹訳 1992『言語普遍性と言語類型論』ひつじ書房)

Corder, S. P. (1967) The significance of learner's errors. *Applied Linguistics*, 5, 161-169.

Ellis, R. (1985) *Understanding Second Language Acquisition*. Oxford: OUP

Ellis, R. (1985) *Understanding Second Language Acquisition*. Oxford: OUP.(牧野高吉(訳) 1995『第 2 言語習得の基礎』ニューカレント インターナショナル)

Ellis, R. (1994) *The study of second language acquisition*, Oxford: Oxford University Press. (金子朝子(訳) 1994『第 2 言語習得序説－学習者言語の研究』研究社出版)

Huter, K. I. (1996) Atarashii no kuruma and Other Old Friends-The Acquisition of Japanese Syntax. *Australian Review of Applied Linguistics*, 19(1), 39-60.

Iwasaki, J. (2000) The Acquisition of relative clauses (sentential modifiers) in Japanese as a second language (JSL) by a young child.『第 11 回第二言語習得研究会全国大会予稿集』60-67.

Murasugi, K. (1991) Noun Phrase in Japanese and English: A Study in Syntax, Learnability and Acquisition. Unpublished Ph.D. Dissertation, University of Conneticut.

Pica, T. (1984) Adult acquisition of English as a second language under different conditions of exposure. *Language Learning*, 33(4), 465-497.

Selinker, L. (1972) Interlanguage, *International Review of Applied Linguistics*, 10, 209-30.

たかはし　おりえ／お茶の水女子大学大学院　応用日本言語論講座
oritaka2004@yahoo.co.jp

The acquisition of noun modifying structures in Japanese
— The overuse and omission of the particle "no" —

TAKAHASHI Orie

Abstract

The phenomenon in which Japanese learners overuse the particle "no" between an adjective or a verb and a noun as in "*omoshiroi no sensei" (= an interesting teacher) -though the "no" is ungrammatical- is often considered as a language transfer of Chinese learners of Japanese as a second language (L2). However, the phenomenon also arises in the utterances of both children acquiring Japanese as a first language (L1) and non-Chinese L2 learners as well.

The following paper will provide an overview of the studies on acquisition of Japanese noun modifying structure of L1 and L2 learners with diverse backgrounds. Items for discussion will include the similarity of its acquisition order between L1 and L2 learners, and the overgeneralization of "no" as a developmental error that occurs naturally in language development. Following these analyses, the paper will examine L2 acquisition of Japanese noun modification, a more complicated, multi-factor process than usually realized, with elements such as L1, age, and learning environment of learners playing vital roles. This examination proposes that those factors may prove especially significant with respect to the time it takes for the incorrect usage of 'no' to fade away. Finally, the paper will explicate necessary areas for future research in this area.

【Keywords】 noun modifying structures, overuse of "no", omission of "no", language transfer, developmental process,

(Department of Applied Japanese Linguistics, Graduate School, Ochanomizu University)